



左岸側から望む蓬萊橋

土木遺産の香 第87回

長生きの「蓬萊橋」 静岡県島田市



八千代エンジニアリング株式会社／管理統括本部／総務部厚生課
本田 悠稀実／HONDA Yukimi
(会誌編集専門委員)

厄無しの蓬萊橋

静岡県の中部に位置する蓬萊橋は、大井川下流域で島田市と牧之原台地を結ぶ全長897.4m、幅2.7mの世界最長の木造歩道橋として1879(明治12)年に完成した。欄干の高さは約50cmと低く、解放感のある橋である。島田市はお茶の産地として有名で、島田市、牧之原市、菊川市にまたがる牧之原台地には日本最大級の広大な茶畑が広がっている。

蓬萊橋は今もなお地元の人々に利用されており、1997(平成9)年に「世界一長い木造歩道橋」としてギネスブックに認定されたこともあり、海外からの観光客も多い。また、よく晴れた日には橋の中ほどで富士山を望むことができ、「897.4m = 厄無し」「長い木の橋 = 長生きの橋」の語呂合わせで縁起が良い橋とも言われている。右岸には牧之原台地の茶畑に続く散策路があり、長寿祈願の鐘や七福神像

などのご利益ポイントも存在している。

蓬萊橋が架かる大井川は、静岡県、長野県、山梨県の3県境に位置する間ノ岳に源を発し、静岡県の



牧之原に広がる茶畑



連台を担ぐ川越人足(島田市博物館)

中央部を南北に貫いて流れながら、島田市付近から広がる扇状地を抜け、その後駿河湾に注いでいる。一級河川に指定されている大井川は古くから急流河川としても知られており、豪雨により度々氾濫を繰り返してきた。しかし、現在でも蓬萊橋は凜として佇んでいる。

なぜ、人々はこの場所に橋をかけたのだろうか。

越すに越されぬ大井川

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と馬子唄で謡われたように、東海道の旅人にとって、大井川は最大の難所であった。1601(慶長6)年、東海道は徳川家康の伝馬制度による街道整備が行われたが、大井川については橋を架けず、徒歩での通行と定められた。大井川は駿河と遠江の国境であったため、幕府の防衛政策などにより架橋だけでなく、渡し舟も認められていなかった。したがって、旅人は多額の費用を払って、川越人足に頼んで川を渡っていた。川越人足とは、人を肩または板に2本の担ぐ棒をつけた連台に乗せて川を渡る、高度な渡渉技術を身につけた熟練者の集団である。

そして、街道の通行量の増加と共に川越人足の方法や料金などを統一する必要が生じ、1696(元禄9)年には川越制度ができた。川越人足を利用する際は川札(切符)でやり取りが行われ、その値段は毎朝、待川越が水の深さと川幅を測って定め、当日に川札の値段が掲げられていた。水の深さは股通や乳通など身体の部位で表され、脇通の四尺五寸(約136cm)を超えると川留めとなった。さらに運悪

く洪水に出くわしてしまえば、何日も渡れず、旅人たちは近くの宿場に滞在して散財させられていた。

川越人足の終焉と蓬萊橋の架橋

1868(慶応4)年、大政奉還により江戸を追われた徳川亀之助、のちの徳川家達(いよざと)が家康ゆかりの駿府(現在の静岡市)へ移住した後を追って、徳川旧幕臣たちも静岡へ移住した。しかし、駿府へ移住したものの幕府が滅びて財力はあるはずもなく、旧幕臣たちは勝海舟に願い出て牧之原台地を開墾して茶の栽培を始めた。勝海舟は幕府海軍の軍艦「威臨丸」の船長として渡米した際に、日本のお茶の商品価値を認識して牧之原台地の開墾を指示した。牧之原台地は、水はけがよく、土は弱酸性で硬いため茶の栽培に適していた。そして1870(明治3)年には、川越制度の廃止により職がなくなった川越人足や島田市の農民も茶の栽培に加わるようになった。

また、この頃になると旧幕臣は生活物資を求め、大井川を渡って島田市との交流を持つようになった。当初は渡舟組合にあった三艘の舟を利用していたが当然足りず、増水すれば渡船できないなど、悩みはつきなかった。そこで、島田市で宿場を営んでいた清水永蔵らが発起人となり、架橋運動を起こした。

開墾者40余世帯の賛同もあって、嘆願書が静岡県令に提出された結果、渡し賃は橋の傍らに掲示することを条件に架橋の許可が下り蓬萊橋が造られることとなった。ここでも清水が発起人となって、最高50銭(約10,000円)から最低10銭(約2,000円)で出資者を募り、蓬萊橋仲間出資組合を結成して架橋工事に着手し、1879年に竣工した。

蓬萊橋の由来は、静岡藩知藩事となった家達が1870年に牧之原を訪れた際、開拓する旧幕臣たち



賃取り小屋(1962年撮影)



蓬萊橋 (1962年撮影)

に「ここは蓬萊(宝の山)だ」と激励したことからきている。農業用のため、開墾関係者は無償で往復させ、その他の者の通行には5厘(約50円)を徴収したことにより、「賃取り橋」とも呼ばれるようになった。

それでも繋いできたバトン

日本でも有数の急流である大井川に架かる蓬萊橋は、2年に1度程度は水害による流失損壊が起きていた。通行不能となった際には、本流ではロープを張って、それを手がかりにして番人が舟で人や荷物を運搬していた。この運搬方法は、大井川の各所で見られ、昭和30年代頃まで続けられた。

架橋以来50年余りにわたって利用者の自主的な運営により大井川の通行を確保してきたが、度重なる修繕に工事費はかさみ、1937(昭和12)年には、つ

いに落橋した橋を復旧することが不可能ほど財政難に陥った蓬萊橋仲間出資組合は解散し、仮橋が設けられて無賃渡橋の状態となった。しかし、島田の農家を中心に蓬萊橋復旧を望む声が多くなり、静岡県勧告もあって、1939(昭和14)年に農耕者を中心とした蓬萊橋利用組合が結成されて、復旧が再開された。

その後も、蓬萊橋は幾度となく台風や豪雨によって流され、また木造のため腐朽も激しかった。蓬萊橋利用組合も度重なる復旧工事に圧迫され、運営は困難を極めた。1952(昭和27)年からは島田市が整備費を補助するようになり、1958(昭和33)年の蓬萊橋の流失では初めて国から農林公共災害として認められた。これを機に、独立法人設立の気運が高まり、1965(昭和40)年には組合員350名からなる蓬萊橋土地改良区が編成された。実はこのとき、下流に新しく「島田大橋」が完成して、蓬萊橋を撤去する話も持ち上がったが、農道としての位置づけが認められたため、全面改修して生き残ることができた。何度も流され、新橋ができてもおお、ほぼ同じ形で架け替えられる橋は珍しいのではないだろうか。

完全なる木造歩道橋からの変遷

従来蓬萊橋は橋脚から何からすべて木造であったが、流失を何度も繰り返したため、1965年の全面改修では、橋脚はコンクリートに架け替えられた。この時、杭と一体として施工された橋脚の全長は12mとなり、それまで不揃いだった幅員も2.7mに揃



補修したあと

え、欄干などの形態も整え、橋面の高さを3m程度上げた。これらにより、大雨による被害が幾分か減少した。

1991(平成3)年の改修では、杭の根入れを深くし、全長を15mに変更した。これ以降、災害によって流出したのはすべて全長12mの杭であり、15mの杭は流されなかったため、2005(平成17)年までに橋脚90基(杭180本)すべてを15mに変更した。

近年は増水時の流木が多くなり、被災の原因が流木の堆積によるものへと変化してきている。

これからも蓬萊橋を守るために

蓬萊橋の橋番は主に日常の維持管理に努めている。橋の前の橋番小屋に駐在しており、橋を管理する蓬萊橋土地改良区より選出されている。話しかけてみると、蓬萊橋や島田市についてたくさん教えてもらえる。橋番の仕事は、地元の人や観光客から通行料を受け取ることのほか、朝に1回、金槌と五寸釘を持って橋の点検に出かけることだ。

蓬萊橋はあらゆる箇所に釘を使用しているので、釘の緩んだ箇所の補修や、敷板や欄干の腐りかけた箇所を点検している。実際に渡ってみると補修したあとがよく分かる。しかし、900m近くある長い橋なので、補修が追いつかない場合は危険な箇所にスプレーで印をつけ、通行人にわかるようにしている。そして、橋番でも手に負えない箇所があれば島田市に連絡することになっている。

島田市も蓬萊橋を維持するために日々努めている。年々、木製の上部工の老朽化が進み、島田市の維持修繕作業量がこれまで以上に増加しているため、限られた予算内での対応に苦慮している。昨今では異常気象による被害の甚大化も懸念されることから、蓬萊橋の予防保全対策や渡橋者の安全確保対策も欠かせない。また、左岸側のコンクリート橋脚の一部は、景観的配慮から木製化粧板で覆い、木製橋脚の雰囲気を出している。

農道として架けられた蓬萊橋は今、島田市の主要な観光地として大きく貢献している。それを裏付けるように「かわまちづくり計画」と称して、蓬萊橋周辺には休憩できるスペースや蓬萊橋897.4(やくなし)茶屋、駐車場の整備などが進められてきた。形は変わっても人々の熱意によって、蓬萊橋はこれからも島田市のシンボルとして長生きするに違いない。

<参考資料>

- 1)「蓬萊橋と牧之原開拓史展:第三十五回企画展」島田市博物館 2004年 島田市博物館
- 2)「世界一長い木橋歩道橋「蓬萊橋」を守る」大塚健司「構造と基礎」416号 2001年8月号 建設図書
- 3)「その後の土木 世界最長の木造橋が再び開通—蓬萊橋(静岡県島田市)大井智子「日経コンストラクション」446号 2008年4月号 日経BP
- 4)「世界一長い木造歩道橋 蓬萊橋」島田市観光協会パンフレット
- 5)「島田市博物館ホームページ」『川越制度』(https://www.city.shimada.shizuoka.jp/shimahaku/kawagoshi/kawagoshi-seido/)

<取材協力・資料提供>

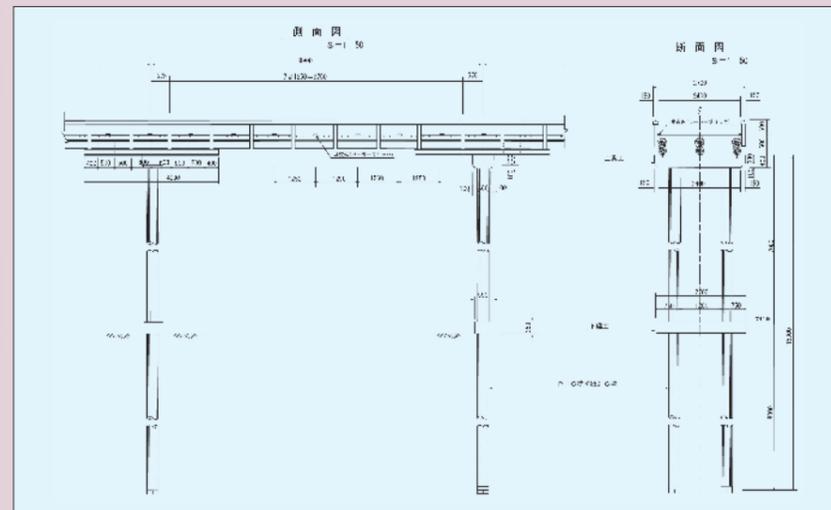
- 1) 島田市役所 産業観光部 農林整備課 農林土木係

<図・写真提供>

- P38上、P38下、P39上写真:本田悠稀実
P39下、P40上写真、P40右下図、P41下写真:島田市役所
P40左下写真:高橋真弓
P41上写真:高見元久



現在の橋脚



現蓬萊橋の側面及び断面図



上流から望む蓬萊橋と富士山